

転生した本好き少女は、

冷徹宰相パパのために暗躍します！

くどんなピンチも本の世界に入れる

『ひみちゅのチート』で解決でしゅ〜



### クローディ

絵本の中に住んでいる精霊。  
ステラのはじめての友達。



### ピュリティ

絵本の中に住んでいる精霊。  
体の大きさを自由自在に  
変えることができる。



### エドワール・ ヴァルステイン

ヴァルステイン帝国の皇帝で、  
アイザックの幼馴染。  
とある病に侵されている。



### ギュスターヴ・デルバー

三大公爵家の一角である  
デルバー公爵家の当主。  
アイザックに対して思うところがある  
ようで——？



### クラリス・デルバー

デルバー公爵家の令嬢。  
高位貴族らしい傲慢さを見せるが——？

## 登場人物紹介



### アイザック・ リヴィエール

リヴィエール公爵家の当主。  
皇帝の命でステラを娘として  
引き取るようになった。  
“血塗りの宰相”として  
恐れられているが、  
ステラには甘いようで——？

### ステラ・ リヴィエール

フェイユ男爵家の令嬢。  
両親に捨てられたことを  
きっかけに前世の記憶を  
思い出した。希少な聖属性の  
魔力の持ち主で、  
本の世界に入る能力を持つ。

## 目次

転生した本好き少女は、  
冷酷宰相パパのために暗躍します！

『どんなピンチも本の世界に入れる  
『ひみちゅのチート』で解決でしゅ』

番外編集

転生した本好き少女は、

冷徹宰相パパのために暗躍します！

～どんなピンチも本の世界に入れる

『ひみちゅのチート』で解決でしゅ～

## プロローグ

ママはわたしをだきながら、いっしょうけんめい川を走っている。

まえにはパパがいて、ふたりは何回もうしろを見ていた。

「まさか、“ちぬ血塗りの宰相”が来るなんて……このままじゃ逃げ切れないわ、どうするの！」

「ちくしょう、ここまで来たのに捕まってたまるかよ！……そうだ、こいつをおとり囃にしろ！」

おとりつてなに？ と聞こうとしたら、パパとママはわたしを川に落とした。

冷たい水がゴボツと口に流れてきて息がでなくなる。

いそいで水から出ようとするけど、体がおもくてどんどんしずんじゅう。

おひさまの光がとおくになっていく。

パパとママはぜんぜんたすけに來ない。いらなから捨てられたんだってわかった。

なんで……なんでこんなことするの……？

いつもぶたれたりご飯をくれなかったりしたけど、泣かないで良い子でいようとがんばってきた。

だけど、パパとママはやっぱりわたしがいらなかったみたい。

だんだん息の苦しいかんじは消えてきて、かわりにまわりが暗くなってきた。

なんだかねむい。

つかれたから、もうねちゃおうとしたとき。

だれかの手がわたしをつかんで、ガバツと水から出してくれた。

「げほっ、ごほっ！ げほっ！」

苦しくてせきがたくさん出るけど息ができる。

せきして息をすってたら、せなかをそとなでなでされた。

「大丈夫か？」

ぼんやり上を見たらカッコいい男の人がいた。

赤いかみをポニーテールにしてて、キリツとした目も赤くてきれい。

水がぼたぼた垂れてくる。

お洋服はこい青色で、金色のもようが光ってた。

にらまれているけど、こわいかんじはなかった。

わたしをだっこするうでは力がつよくてあったかい。

なんだかとっても安心できる。

もしかして、この人は天使さまなの？

赤いかみの人はまわりを見ながら大きなこえを出す。

「あいつらを追いかける！ 川を渡られたら面倒だぞ！」

うしろの方から來た騎士さまたちが何人も川をわたっていく。

みんな黒色のつよそうなよろいを着てた。  
赤いかみの人はわたしをだっこしたまま、騎士さまたちとはぎやくの方に走っていく。  
わたしをだっこする手は、パパとママよりとてもあったかい。  
ずっとこの人といられたらいいな……

## 第一章 はじめての世界

熱に浮かされながら夢を見た。

信じられないけど、前世の夢だ。

両親は自分たちが敷いたレールから私が外れることを許さなかった。

勉強、塾、習い事、友達付き合い、進路……私の日常は、全て両親の管理下にあった。

そこに愛はない。あるのは子<sup>私</sup>の希望を無視した親のエゴだけだった。

両親が敷いたレールの通りに人生を過ごし、二人に言われるがまま入社した会社はブラック企業。  
連日、始発から終電まで働き、自宅の滞在時間が一時間にも満たない日が何日も続いた。大勢いる社員たちの前で理不尽に叱責されている光景を、会社のSNSで晒<sup>さら</sup>されたこともあったつけ。

今思えば、ずいふんと苛<sup>か</sup>烈<sup>れつ</sup>な会社に入ってしまった。

そのような辛い毎日の中、唯一の生き甲斐だったのは読書だ。

家や電車で少しでもページを捲<sup>めく</sup>れば、私を現実とは違う世界に連れて行ってくれた。

本の世界に入り込めたらどれだけ幸せかと、何度思ったかわからない。

ここではないどこかの世界に没頭できる時間だけが、私の疲れ切った心を癒やしてくれたのだ。

——いつか、思いつきり読書する人生を送る。

それが私の夢だった。

そして、二十七歳の誕生日を迎えて間もなく。あの日がやってきた。

深夜、いつも通りオフィスで働き続けていた私は……過労死した。

全身の力が抜け、視界が隅の方から少しずつ暗くなり、全身が闇に囚われるような感覚は今でもよく覚えている。それが私の前世の最後だった。

死ぬ寸前に祈った“願い”が思い出される。

——もし新しい人生があるのなら、親からの愛を感じたい。

その願いが通じたのか、私は異世界に住むちびっちゃん幼女——ステラに転生したらしい。

でも、この世界で三年過ごした結果は……

少しずつ意識が鮮明になりぼんやりと目を開けたら、見知らぬ少女が鼻に当たりそうなほど至近距離で覗き込んでいた。

「びゃっ！」

驚きのあまり変な声を出してしまった。

目の前にいるのは、ボブカットの黒髪に黒くて丸い目をしたあどけない少女だ。

まん丸に見開いた目で私を見る。

黒のワンピースと白いエプロンを身に着け、頭にはこれまた白いヘッドドレスが載っている。

しばしの沈黙の後、少女は慌てふためきながら部屋を飛び出した。

「起きました！ 女の子が起きましたよー！」

ドタドタという少女らしくない足音が響いた後、部屋は再び静かになる。

誰か呼びに行ってくれたってこと？

そういえば、ここはどこだろう。私の家ではないはず。

身体を起こして室内を見渡してみる。

天井からは美しい造型のシャンデリアが吊るされ、穏やかな明かりを放つ。

柵の間から見えるキャビネットやソファなどの家具はいずれも洗練されたデザインで、それでいて嫌みのない上品な雰囲気だ。

壁には風光明媚な風景画が飾られ、落ち着いた室内を豊かに彩っている。上位貴族の家だ。

自分が寝かされたベッドをふにふにと押すと、ふわふわと押し返された。最高の手触りと素晴らしいクッション性で、幼女の私を優しく包み込んでくれる。

前世そして今世での私の家のベッドよりずっと良い品だ。

着替えさせられたらしい衣服もまた着心地が素晴らしい。

ひとしきり周囲を確認した後は、自然とため息が漏れた。

なんだか……ここにただで安心できる。

空気が雰囲気といった、言葉に出来ない安心感があつた。

ほうっとため息を吐いたとき、先ほどの少女が戻ってきた。

息を切らせた様子からよほど急いだことがわかる。

彼女に続き、茶髪をひつつめ髪にした中年のおばさんメイドと、眼鏡をかけた真面目な印象の男

性も部屋に入ってきた。

いったい何事かとばかり眺めていたら、真っ先におばさんメイドが歓声を上げた。

「目が覚めてよかったよ！ もう大丈夫、あたいたちがついているからね！」

「あ、あの……っ！」

突然抱き締められたことに驚いて涙が出てしまった。

心は二十七歳の大人なのに、どうしても涙が収まらない。

きつと、子どもの身体に引きずられてしまっているのだ。

そんな私をおばさんメイドは優しく背中を撫でてくれた。温かい気持ちが伝わり、たちまち心が落ち着いた。

「驚かしちゃってごめんなさいねえ。でも、本当に心配だったんだよ」

ふと、壁際の大きな姿見に私の姿が映った。

三歳の私だ。

濃い紫色の髪は香油で丁寧<sup>ていねい</sup>に撫でつけられ、美しい艶が浮かぶ。

紫色の瞳はアメジストの如く輝き、私自身でさえ引き込まれそうだ。

きめ細かな白磁<sup>はくじ</sup>の肌はすべすべで潤いに溢<sup>あふ</sup>れている。

彼女たちが世話してくれたのだと容易にわかった。

だって、私は川に捨てられるほど邪魔物扱いされてきたから。

異世界に転生しても、私は親から愛されることはなかったのだ。

この世界の家で受けた様々な仕打ちが思い出され、やや緊張しながらおばさんメイドに尋ねる。

「ここはどこでしゅか……？」

「落ち着いて聞いてくださいね。ここはリヴィエル公爵家です。この国……ヴァルステイン帝国の宰相——とっても偉い人のアイザック様があなたを助けてくれました」

ええっ!?

アイザックって、もしかして！ と尋ねる前に、彼女の後ろから眼鏡の男性が顔を出した。

「マチルダさん、一度僕に診せてもらえませんか？ 悪いところがないか調べないと」

眼鏡の男性の言葉で椅子に移動させられ、テキパキと準備が進められる。

医師師らしき彼の青い髪は右側だけ伸ばされ、眼鏡の奥の青い瞳は湖畔<sup>こはん</sup>のように静かだ。白衣らしき清潔なコートには、襟元の辺りにおしゃれな刺繍<sup>しゅう</sup>が施されている。

病院嫌いのため知らぬうちに表情が硬くなったのか、少女メイドが穏やかな笑顔を私に向けた。

頭を優しく撫でてくれる手も併せて、私を大事に思う気持ちが伝わってくる。

「安心してくださいね、この人はジスラン先生。とっても優しくて凄腕の医師師です。そして、わたしはティナ。仲良くしてください」

「では、診察しましょうか。動いちゃダメですよ」

ジスラン先生は私の額に手を当て、おでこがじんわりと温かくなった。

お風呂に入っているような不思議な感覚を覚えた後、彼の表情に安堵<sup>あんど</sup>の色が浮かぶ。

「……うん、問題ありませんね。魔力の乱れもないし怪我もない。しばらくは安静が必要ですが、

もう普通の生活をして問題ないでしょう。後遺症がなくて安心しました」

よかった、私は健康らしい。

マチルダさんとティナもホッとした様子だ。

ところが、ジスラン先生は診断を下したもののどこか納得のいかない様子で、それを目ざとく見つけたマチルダさんが詰める。

「どうしたの、ジスラン先生。何か気になることがあるのかい？」

「いや、気になるってほどではないんですけどね。たぶん……気のせいです。確証が持てないので」

「はつきり言ってくれないとわかんないよ。余計に不安になるから今言っておくれ」

この中じやマチルダさんが一番強いみたいだと、気圧<sup>けいあつ</sup>されるジスラン先生を見ながら思ったとき、部屋の扉が力強く開けられ、赤い髪と目をしたあの芸術品のような男性——私を助けてくれた怖いケメンが現れた。

彼が……アイザック様だ。

たちまち、マチルダさんたち三人は姿勢を正し、アイザック様は険しい顔で私をチラリと見る。

「目覚めたようだな」

「あ、あい、あの……助けていただいてありがとうございます。びちょ濡れにしちゃってごめんなしやい」

「別にいい。お前は自分が誰だかわかるか？」

「わたちはステラ、です。フェイユ男爵家の……」

自分の家のことを思い出したらどうしても心が暗くなる。

命は救われたけど、私はこの後どうなるんだろうか。

そして、両親は今どこで何をしているのかなど鬱々<sup>うつうつ</sup>と考える私には構わず、アイザック様はジスラン先生に尋ねる。

「彼女の健康状態はどうだ？」

「先ほど診察したところ特に異常はありませんでした。しばらく安静にしていれば完全に回復するでしょう」

「ふむ、承知した」

ジスラン先生の診察結果に短い言葉が返される。

安心したものの、それはよかったのだという感想はなく、ただ報告を聞いた旨の内容だった。

部屋に入ってから、アイザック様はまったく表情が変わらない。

私のことはどうでもいらしく、なんとなく元気が萎<sup>しぼ</sup>む。

しょんぼりする私に、アイザック様はあの事実を淡々と告げた。

「わかっているとは思いますが、お前は実の両親に捨てられた」

「……あい」

前世の記憶を思い出したこともあって気持ちにある程度の整理はついていたけど、やはり辛さは多少はあった。

まずいと思ったのか、ジスラン先生が顔色を変えて訴える。

「なんてことを仰るのですか、アイザック様！ 彼女はまだ目覚めたばかりで……！」

「三歳ともなれば、自分に何が起きたか理解できる年齢だ。このような事実は隠したり誤魔化した方が本人を傷つける。なるべく早く、正直に伝えるのが最善だろう」

言っている内容は正しいもので、むしろ誠実な印象を受けた。

沈黙が横たわる中、アイザック様はため息混じりに衝撃の事実を明かす。

「皇帝陛下の命により、お前は私が娘として引き取ることに決まった」

「……えっ？」

「ステラ・フェイユは今日からステラ・リヴィエールになる、と言ったのだ。今後はこの屋敷で過ごすことになる」

いったいどういうことかと、私だけじゃなくて部屋全員が混乱したと思う。

でも、期せずして「父」という存在ができて胸が温かくなってきた。

ぽかぽかする私とぽかんとするみんなに、当のパパ様は落ち着いた様子で言葉を続ける。

「こちらでいろいろと調査検討した結果、ステラには極めて貴重な聖属性の魔力が宿ることがわかった。子どもにしては魔力量も多い。引き取るに至った理由の一つだ」

室内に強い緊張が走った。

ジスラン先生、マチルダさん、ティナの反応に当てられ、私もまた顔が強張る。

漫画やアニメと同じように、魔力とは魔法を使うエネルギー……と考えていいのだろうか。

フェイユ男爵家では碌に教育を受けてこなかったので不明だ。

皇帝陛下や宰相、この国の名前でさえ、両親の会話で学んだのだ。

聖属性についてもほとんど知識がない。

みんなが黙る中、ジスラン先生だけは納得した様子で呟いた。

「やっぱりそうでしたか。診察のとき余波を感じ、もしやと思っていたのです」

会話の内容から、聖属性の魔力は貴重な存在なのだと推測できる。

諸々の事実が明かされ驚いたものの、この屋敷で暮らせると聞いて安心感が湧いてきた。

居場所ができたことは、幼女の私にとって身の安全そのものだ。

フェイユ男爵家には戻りたくない。嫌な思い出は私が育った屋敷にさえ宿っている気がした。

「まだ確定はしていないが、国内に潜伏している内通者がステラを奪おうと襲撃に来るかもしれない。屋敷の警備は常に万全の状態だ。それでも十分注意するように。特に、見知らぬ来訪者には気を付けろ」

部屋みんな（もちろん、私も）は真剣な表情で頷く。

怖い話はそこで終わりと気が抜けたら、パパ様はさらに穏やかじゃないことを言い始めた。

「いつそのこと、力を持つ大人になるまで屋敷に閉じ込めておくのがいいだろう。そうだな、それがいい」

えっ！

「アイザック様、それでは子どもの成長に悪影響しかありません。僕の研究でも日光を浴びて外の

空気を吸わなければ健やかに成長できない、という結果が出ています」

すかさずジスラン先生が苦言を呈してくれて、閉じ込めの話は立ち消えになった。

用は済んだとばかりにさっさと出て行こうとするパパ様に、マチルダさんがさがるように呼び掛ける。

「お待ちください。せめて、ステラ様のお顔をもう一度見てから宮殿にお戻りいただけませんか？ 父親の顔がわからなくなつては大変です」

「……見るだけだぞ」

パパ様が私に近づき、その不機嫌そうな顔がドアップになる。

眉間に皺しわが寄る顔はそれでも美しく、世界的に著名な名画を見ているような気分だった。

切れ長の赤い目は鋭くてカッコいいし、ポニーテールだってイケメンにしか許されない髪型だ。見れば見るほど芸術品みたい。

怖く見えるけど、私には優しくも見える。

この人が私の新しい父……気がついたら自然と手を伸ばしていた。

「パパしゃま……」

呼びかけても眉一つ動かない。

無視されるかと思つたけど、パパ様は私の指をそつと握った。

「少なくとも、私はお前を川に捨てたり危害を加えたりはしない。この屋敷にいる者たちも全員だ。だから……安心して暮らせばいい」

相変わらずの硬い声音は、私の心に柔らかな温かさを与えてくれた。

パパ様は今度こそ立ち去り、室内には静けさが戻る。

マチルダさんが大事そうに私を撫でた。

「ここにはステラ様の味方しかいませんからね。アイザック様は“血塗りの宰相”と呼ばれる方です。ありますが、きつとこれから仲良くなれます」

——“血塗りの宰相”

そうだ、思い出した。パパ様の二つ名だ。

なんでそんなに怖い呼び名がついているんだろう。

私を撫でるマチルダさんの手は慈愛に溢れ、続いてティナとジスラン先生も優しく撫でくれた。

「アイザック様がないときはわたしたちがお世話させていただきますからね。こんなに可愛い子どものお世話ができるなんて幸せです」

「やはり、子どもは可愛いものです。僕は癒やされてばかりですよ」

三人に愛めでられ温かい気持ちで胸が満たされる。

優しい人ばかりで本当によかった。

本も読めたら嬉しいけど、それは高望みすぎるかな。

結局、フェイユ男爵家では一冊も読ませてもらえなかった。

緊張が解けて今までの疲れがどつと出たのか、急激に激しい睡魔に襲われた。

眠い……目が覚めても夢じゃなかったらいいけど……などと願いながら、私はいつの間にか眠っ

てしまった。

穏やかで安らかで幸せな眠りに。



水中から助けられたステラが目を覚ます、少し前。  
アイザックは宮殿の廊下を歩いていた。

今歩いている大理石の床でさえ汚れ一つなく磨き上げられ、天井には優雅な天井画が描かれて  
いる。

宮殿で働く文官や使用人が忙しなく行き交う様からも、この国の国力が窺えた。

そんな彼らは歩くアイザックの姿を見かけるたび、怯えた様子で直立しては一礼する。

日常的な光景を横目に、当の本人は心中で呆れたため息を吐いた。

(この対応にもすっかり慣れてしまったな)

アイザックが宰相になったのは、四年前の二十歳の時のことだ。

先代の宰相——彼の実父が死すと同時にこの地位に就いた。その後は国内各地における魔物討伐  
や、冷徹とも言われる手腕で宮殿の腐敗を浄化し、周囲に恐れられた。

鋭い目つきの他、人嫌いの性分や赤い髪と目が血を連想したためか、いつしか“血塗りの宰相”  
と呼ばれるようになったのだ。

(まあ、余計な会話が必要ないから楽なのだが)

彼が人嫌いなのは事実であり、無駄な雑談などが日常から省かれるので助かる面もある。  
周囲の怯えた視線を感じつつ目的地に着いた。

宮殿二階の中央部に位置する部屋だ。

重厚な扉には国章である剣と盾が描かれ、他の部屋とは一線を画していることがわかる。

アイザックは立ち止まると、軽く深呼吸してからノックした。

「皇帝陛下、失礼いたします。アイザックでございます」

「開いているよ。入っておいで」

穏やかな声が聞こえ、扉を開ける。

広々とした室内にはアンティーク調の家具がセンスよく配置され、窓から差し込む光に柔らかに  
照らされている。一番奥に座する黒檀の机には、中性的な優男がいた。

ふんわりとした金髪は穏やかに輝き、鮮やかな碧眼には少年らしいあどけなさが残る。

ここヴァルステイン帝国の皇帝——エドワール・ヴァルステイン。

要するに、ここは皇帝の執務室だった。

アイザックは机の前で跪き首を垂れる。

「陛下より拝命した件の報告にまいりました」

返答はない。

尚も首を垂れていると、くすくすと少年のような笑い声が降ってきた。



「いつも言っているじゃないか。僕たちの仲なんだ。もっと砕けた口調で話してくれ。君がそんなんだと僕の方が緊張してしまうよ」

二人はいわゆる幼馴染だ。

家同士の関係もあり幼少期からよく一緒に過ごしてきた。

その関係は大人になってからも続き、互いに良き友人として今でも大切に思っている。

「まあ、形式は大事ということだ。特に、国際情勢がこんなときならなおさらな。いつどこで誰が聞いているかわからん」

「いやはや、君の方が皇帝にふさわしいよ。僕の寿命が潰えたら後は頼むね」

「冗談でもそんなことは言うもんじゃないぞ」

笑えない冗談に、アイザックはため息交じりに答えながら立ち上がる。

そんな彼に、エドワールは真面目な表情を向けた。

「女の子の様子はどうだい？」

「まだ眠っている。ジスランの診断では、睡眠で体力が回復すれば自然に目覚めるだろうという数とだ」

「それを聞いて安心したよ。アイザック、あの子を助けてくれて本当にありがとう」

あわや溺死となったステラの病状はエドワールもひどく心配しており、祈るような思いでここ数日を過ごしていたのだ。

アイザックは黙礼で答え、本題に入る。



「さて、報告を始めよう。結論から言うと、やはりあの幼女は聖属性の魔力を持っていた」  
「十年に一人生まれるか否かの極めて貴重な聖属性……か」

「川の中でも白く光っていたおかげで、沈んだ場所がわかったんだ」

ステラは知らなかったが、彼女の身体が光った理由は本能的な魔力の放出だった。

弱々しくながらも暗い水中で発光体のように輝き、居場所をアイザックに懸命に知らせた。

「君が考えたように、あの子は彼の国に攫<sup>さら</sup>われるところだったんだね？」

「概ね間違いないはずだ」

「追いつくのが一歩遅ければ、この国は破滅していたかもしれないね。まったく、彼の国は恐ろしい軍事技術を考案するよ。子どもの純粋な魔力を大量に凝縮して、極めて強力な魔導砲を作ろうとは……」

「新型魔導兵器とはよくいったものだ」

——ドラウゼン軍事連邦。

ヴァルステイン帝国の隣に位置する巨大な国で、ここ最近急速な軍事開発を行い力を伸ばしている。

アイザックの分析により、最終目的は世界全体の主権を手に入れることだと明らかになった。

周辺にはすでに呑み込まれた小国も報告されており、その毒牙は帝国にも伸びつつある。

——子どもの誘拐。

新型魔導兵器の動力源を集めるため、ドラウゼン軍事連邦は奴隷<sup>どれいしょうにん</sup>商人などを使って子どもを誘

拐していたのだ。

捕らえた奴隷商人などの証言から、彼の国は極めて貴重な聖属性の魔力を持つ子どもを探していることも判明した。兵器開発に絶対的に必要な要素だと考えられる。

「じゃあ、君の推理を聞かせてもらえるかい？ 女の子とこの国を助けるに至った経緯を」

エンドワールに促されると、アイザックは真剣な面持ちである日のことを——ステラを救出した日の報告を始めた。

「私は金と地理の情報から推理を立てた。異変を感じたきっかけは、彼女の両親——フェイユ男爵家の財務報告書だ。あまり大きな声では言えないが、あの家には多額の借金があった。男爵家という規模では、一生をかけてようやく返せるような金額だ。それがある日……一括で返済された」

「……続けてくれ」

「フェイユ男爵家の資産目録を確認した結果、領地から新たな鉱山や特産品が発見された報告はない。彼らが新しく商売を始めたり成功した記録もない。また、別の場所から借金をした記録も確認されなかった」

「表に出る金で借金は返済されなかった、と君は考えたわけだね？」

エンドワールの問いかけに、アイザックは無言で頷く。

「私は金の出所が気になった。そこで、フェイユ男爵家の戸籍を調べると娘が一人いるとわかった。しかし、仮にドラウゼンにその娘を売った場合でも、例外を除いて借金を返せるほどの報酬は得られないと推測された」

「僕たちは捕らえた奴隷商人や他国から得た情報で、子どもの売買の相場を知っているからだ。どんな属性の魔力持ちなら、だいたいいくらで取引されるか推測できる」

「そうだ。フェイユ男爵家に追加で四九九人の子どもがいて、全員戸籍に登録していれば話は別だがな。そして、その例外というのが……」

「聖属性の魔力持ちだ。数が少ないため詳細は不明だが、他の属性に比べて魔力の質も量も高い傾向にある。聖属性特有の魔法も存在するらしい。だから、高額で取引されたんだろう」

エドワールの表情はすでに硬い。

心なしか、室内の空気も硬さを増した。

緊張感が薄らと漂う中、アイザックは淡々と説明を続ける。

「彼の国に聖属性の魔力持ちだった娘を売ったと考えれば、借金の一括返済は可能だ。報酬は前金として受け取ったのだろう。もう一つ、フェイユ男爵家が位置する場所もこの推理を裏付けた。あの家から北に三十キロメートルほど進むと、ドラウゼンとの国境の川がある。健康な成人ならば、丸一日歩けば辿り着けてしまう」

「ふむ……。フェイユ男爵とその妻は、なぜわざわざ自分たちで女の子をドラウゼンに届けようと思っただろうね。向こうから指示があったのかな？」

「おそらく、旅行という体で子ども連れ出したと私は考えている。旅行ならば家族連れを見かけてもおかしくないし、男爵家は貴族だ。各地の関所を通過するのは簡単だったはずだ。聖属性という極めて貴重な魔力持ちならば、なるべく警戒されないような自然な移送を心掛けたのだろう。

万が一を考え私が直接出向いたが、結果として正解だったな」

誰しも多かれ少なかれ魔力を持つ。物心がつき自分という存在を認識できるようになった三歳頃、身体を流れる魔力にも変化が起きて属性が固定される。

何かに喜んだり感動したり悲しんだり……。心が揺れ動いたときに魔力が覚醒し、それ以降魔法として使えるようになるのが常だった。

フェイユ男爵夫妻が娘の聖属性に気づいたきっかけは不明だが、何かの拍子にステラが魔力を放ったのだろうとアイザックは説明を補足する。

客観的な事実に基づく論理的な推理を聞いたエドワールは、思わず感嘆と呟いた。

「なるほど。相変わらず、君は視野が広いね。宰相でいてくれてよかった。我が国では、貴族はみな財務報告書や領地の資産目録を宮殿に提出する義務がある。内乱を事前に防ぐための古い規則だと思っただけで、今回はその古い規則に救われたわけだね」

「ああ、そういうことになる」

「残された使用人たちの聴取はもう終わったのかい？ フェイユ男爵家に接触したと思われる、人物や組織に関する他の手掛かりはどうだ？」

アイザックは数枚の書類を差し出す。

使用人たちに対する事情聴取を端的にまとめた物だった。

「今回の件に、フェイユ男爵家の使用人は関わっていない。全て、フェイユ男爵とその妻で完結したようだ。ドラウゼンに関する手掛かりもなかった。燃やすよう指示されたか、元から何も記録に

残していなかったのだろう」

「そうか。残念だが致し方ない。彼らはなかなか尻尾を掴<sup>つか</sup>ませないね」

今まで捕らえた奴隷商人やその類いの人間は完全に末端の者たちで、その上の組織に繋<sup>つな</sup>がる重要な手掛かりは入手できないでいた。

報告を終えたアイザックは、しばし悩んだ末に胸の小さな引っかけかりを吐<sup>と</sup>露<sup>ろ</sup>する。

「あの子を見捨てていれば、私はフェイユ男爵夫妻に追いついただろう。さすれば、今頃は国内の内通者を炙<sup>あぶ</sup>り出せていたかもしれない。私の判断はよかったのか……少々疑問に感じる」

「アイザック」

エドワールは立ち上がり、大事な親友で頼れる宰相の肩を掴む。

「それは違うよ。君は間違っただけじゃない。むしろ、正しい行いをしたんだ。目の前で溺死寸前の子どもを見捨てるなんて人のすることではない。もし見殺しにしていたら、僕は友達を辞めていただろうね」

彼の言葉を聞き、アイザックは身体から力が抜ける感覚を覚えた。

「……そうか。そうだな」

「君は『血塗りの宰相』などと呼ばれているが、性根はそんなに恐ろしい人間ではないのさ。まあ、その二つ名は外交上も国内の統治にも便利だから僕が否定することはないのだけど」

「……おい」

睨<sup>にら</sup>むアイザックに対しエドワールはくすくすと笑い、室内の空気は軽くなった。

アイザックは力の抜けたため息を吐いた後、最後の経緯を説明する。

「法令に基づき、フェイユ男爵家の領地は没収した。今後は我がリヴィエール家が統治する。ちょうど、信頼できる家令を送ったところだ。領地の混乱を終息させつつ、ドライゼンに関する情報を集める」

「ああ、それで頼むよ」

「エドワール、私の勘でしかないが念のため伝えておく。フェイユ男爵家に接触した人物もしくはその後ろ盾となる組織は、意外と近くにいないかもしれないぞ。宮殿に出入りする貴族でさえ、ドライゼンと内通している可能性はある」

「十分に気をつけるしかないね。僕も君も……」

彼の国は直接的な軍事行動を仕掛けるだけでなく、内通者——いわゆるスパイを使うこともよくあった。あらゆる可能性を視野に入れる必要があると話したところで、アイザックは別の話題を切り出す。

「ところで……身体具合はどうだ？」

エドワールの表情が強張った一瞬を、アイザックは見逃さなかった。

一方、取り繕った笑みで誤魔化すのはエドワールだ。

「まあ、あまり変わりはないかな。悪くはなっていないよ」

「それはつまり、良くもなっていないということか」

アイザックの目には、エドワールの襟元に隠れた肌が映る。

紫色の毒々しい斑点模様が、清潔な衣服の中で影を潜めていた。

「早く玲露草<sup>れいろうそう</sup>さえ見つけられればいいのだが……すまんな、探索は難航している」

「いや、気にしないでくれ。僕はこの身体だからこそ、毎日を真剣に生きていけるんだよ。もちろん、健康が一番だけどね」

エドワールのやつれた微笑みに、アイザックは胸の痛みを覚えた。

唯一と言っていい大切な友人が日に日に弱っていく――

その光景を目の当たりにするのは辛いものがあるのだ。

「では、私はこれで失礼する。忙しいところ悪かったな」

「ちょっと待ってくれ。あの女の子についてだが……アイザック、君が娘として引き取ってくれ」  
「……なに？」

背中に投げかけられた言葉を受け、アイザックは立ち止まった。

「なぜ、私が娘にしなければならなんだ。私が子ども嫌いなのはよく知っているはずだろう」

「フェイユ男爵家に接触した、おそらくドラウゼンの関係者もあの女の子は聖属性持ちだと知っている。国内のどこに潜んでいるか裏に誰がいるかわからない以上、どこかの修道院や教会に預けるわけにはいかないんだ。ましてや、他の貴族に養子に出すことさえリスクが大きい」

「……」

エドワールの話す内容は尤もで、アイザックもまたその背景はよく理解していた。

「僕が引き取ればいいが体調に不安がある。もしものとき、守れる力がある人間の傍<sup>そば</sup>にるのが

安全なんだ。だから、この国で一番強く、僕が一番信頼している君に預けたい」

真剣な瞳で頼まれたアイザックは、やがて諦めた様子で頷いた。

「……わかった。私が引き取ろう。これも帝国のためだ。よもや、結婚もせず子どもを持つことになるうとはな」

「ありがとう。やつぱり、君が宰相で本当によかった。それに、子どもを持つのは案外悪い話ではないかもしれないよ。令嬢たちからの結婚攻勢を牽制<sup>けんせい</sup>できると思えばね」

「まあ、たしかにそのような副次的作用はありそうだ」

見目麗しく、宰相でかつ公爵家のアイザックは、数多<sup>あまた</sup>の令嬢から毎日のように茶会や夜会の誘いを受けていた。血塗りの宰相として恐れられているはずだが、一部の令嬢にはむしろ魅力的に見えるらしい。

結果、アイザックは年頃の女性からのアプローチに辟易<sup>へきえき</sup>する日々を送っていたのだ。

今より多少はマシになるだろうと考える彼に、エドワールは微笑みの残る真剣な表情で言う。

「あの子が聖属性を持っていることは秘密にしよう。兵器開発に絶対必要な存在ともなれば、身柄を狙われることは必然だ」

「ああ、承知している。話すのは屋敷の信頼できる人間だけとする。まあ、ジスランは優秀だから診察のときすでに気づいているかもしれないが。では、また夜の会議で会おう」

別れの挨拶をしたアイザックが扉に手をかけたとき、彼の背中に穏やかな声が乗る。

「ありがとう……僕の親友よ」

小さな微笑みで答え、静かに一礼して部屋を出た。

日に日に死期が色濃くなる大切な友人の思いを噛み締めて。

廊下を歩くアイザックの頭に浮かぶのは、やはりステラのことだ。

（聖属性の魔力を持つ幼女か……。助けたことは間違っていないだろうが、まったくんだ拾い物をしてしまったな）

基本的には屋敷に置いたままになるだろう。

だとしても、自分の邸宅に年端もいかない子どもがいると思ったら忙しい心境になった。

アイザックは誰もわからないくらいわずかに肩を落としつつ、ステラが待つ公爵邸に向かう。

## 第二章 ステラの力

パパ様に助けられて、あつという間に二週間が過ぎた。

リヴィエール公爵家での暮らしはとても温かい。

今もまた、自分の部屋でマチルダさんに愛でられながら読み書きの練習をしていた。

「ステラ様は理解が早くてすごいですねえ。文字もしっかりしているし、普通の子どもよりずっと優秀ですよ」

「ありあと。褒められて嬉しいの」

この国の言語——ヴァルSTEIN語は前世の英語に似ているのと私の精神が大人であるためか、文字の読み書きはもう完全にマスターした。フェイユ男爵家では教えてくれなかったから、リヴィエール公爵家の人たちには感謝してもきれない。

文字が読めなければ、大好きな本も読めないもの。

お屋敷には図書館があり、宮殿にはもっと大きな図書館があるらしい。

いつか両方に行くことを夢見ている。

ティナとジスラン先生はもちろんのこと、他の使用人たちだって大事にしてくれる。

それこそ真綿に包まれるような日々のおかげで、今の私は心身ともにすっかり回復、元氣いっぱ

いだ。

ところが、肝心のパパ様は……全然会いに来てくれない！

何かのついででたま〜に私の部屋を訪れては生存を確認し、満足気に去る。川に落したり危害は加えないとは言ってくれたけど、放置気味なのはどうなんだろう。

せっかく親子になれたのに……

どうにかもつと仲良くなれないものかと考えていたらティナがやってきた。

彼女が持つ四角い物体はもしかして……!?

「ステラ様、ご本を持ってきましたよ。最近、子どもたちに人気の絵本みたいです。読んでみますか？」

「絶対読む！」

嬉しさのあまり、震えながら本を受け取る。本の題名は【黒猫妖精クローディの冒険】。

羽の生えた黒猫とユニコーンが描かれた表紙は鮮やかで、草原みたいな背景も相まってすごく素敵な絵本だった。

さっそく読もうとしたとき、ティナが思い出したように手を叩いた。

「マチルダさん、そろそろアイザック様の大切なお荷物が届く時間です。受け取りに行きましょう」

「ああ、そうだったね。ステラ様、ちよつと一人で待っててください。何かあったらすぐ呼ぶんですよ」

「長い針が三になるまでには戻ってきますからね」

あーい、と手を振って二人を見送る。

壁掛け時計の長針は今一を指しているので、十分以内に戻ってきてくれるということだ。

ああ、やつと本が読める……！

屋敷に来て、もしかしたら一番ワクワクした気持ちで表紙を捲る。

最初に描かれていたのは、白い雲が浮かぶ青い空に草原だ。草原の真ん中には女の子が立っており、空から降りてきた羽つきの猫を優しく受け止めていた。

ふむふむ、主人公はこの子の友達を探す旅に出るのね……と思ったとき。

私の身体が突然白く輝き始めた。

「え、な、なに!? どうちたの!?」

あの川の中でも光っていたけど、それより何段階も強い白色の光が私の身体から放たれる。白い輝きが眩しくて目を瞑ってしまった。

数秒も経たずに光が収まったのを感じ、恐る恐る目を開ける。

飛び込んできた光景に私は驚きを隠せなかった。

見渡す限りの青い空には白い雲が長閑に浮かび、地面には緑の草花が生い茂る。

さっきまでお屋敷の部屋にいたのに！ ここはどこ？

全然知らな……いや、もしかして……

「絵本の世界？」



草や大地の匂い、風の肌を撫でる感覚、穏やかな日差しの温かさなど目に映るもの、身体で感じるものが非常にリアルだ。

まさしく、私は絵本の世界を“体感”している。

「なんで、ご本の世界に來ちゃったんだろう……？」

本を読んだとき、私は別に何もしていない。

ただページを開いて読んだだけだ。

身体は自由に動くようなので、まずはよちよちと歩き回ってみる。

草を踏みしめる感覚や、柔らかな土に靴が沈み込む感触が楽しい。

前世では読書のたび、本の中に入り込めたらいいな、なんて思っていたけど本当に入ってしまったとは……きっと、これは魔法だ。ファンタジーってすごい。

しばし歩いていると重要なことに気づいた。

この世界からちゃんと出られるよね？

まさか、閉じ込められっぱなしということはないだろうけど、不安がないと言ったら嘘になる。

できれば、もう少し楽しんでからティナたちのところに戻してほしい。

何かクリア条件的な要素があったらちよつと大変……ん？

どこから現れたのか、私の頭上に光の塊がゆっくりと舞い下りてきた。

えー、なんだろう。

手を伸ばしてみたら、光の塊は空中でパンツと弾けた。

わっ、びっくりした。

綺麗な粒子が舞う中、白い羽の生えた黒猫が現れる。

『初めまして、可愛い女の子。僕は羽つき猫の精霊、クローディさ。会えてとても嬉しいよ』  
「ふわわわわ……猫ちゃん！」

抱きついたクローディの身体はもふもふで、何度も撫で撫でしてしまった。

猫ちゃん、可愛い！

前世では猫が好きだったものの、とうてい飼うことはできなかった。

ビロードのような毛並みを楽しみ、夢の猫吸いも堪能してしまう。可愛さのあまりむぎゅむぎゅしていると、クローディが腕の中から顔を出した。

『ねえ、僕と一緒に友達を探してくれないかい？ お空から落ちてくるとき、嵐に巻き込まれてはぐれてしまったんだ』

「もちろん！一緒に探しまちよ！」

絵本の世界で、クローディとの楽しい冒険が始まった。

美しい森の中では空飛ぶお花に乗ったり、大きな葉っぱに乗って川をのんびりと下ったり、他の可愛い精霊たちのお家にお邪魔したり……

絵本の世界はどこも優しさに溢れていて、本当に楽しい毎日を送る。

クローディの魔法で連れて行ってもらった空の雲は、本当に綿飴わたあめのように甘くておいしかった。

やがて、世界で一番大きな木の麓に着いて、クローディの大切な友人——虹色ユニコーンの精霊、

ピュリティと出会った。

『ピュリティ、ここにいたんだね！』

『クローディ！会いたかったよー！』

仲睦まじく再会を祝う二匹の精霊を見て、私の胸はじんわりと温かくなる。

お友達が見つかってよかった！

再会を祝した後、クローディがこれまでの旅の経緯を説明してくれる。

『ステラが僕の冒険を手伝ってくれたのさ』

『こんなに可愛い女の子が私を探してくれたんだね。ありがとう、ステラちゃん』

『クローディと会えてよかったね！』

頭を下げたピュリティの角を撫でていると、強く光り輝いた。

「お角が虹色に光ってる！」

『元気になる光るんだ』

『彼女の角はこの世界で最も美しいとも言われているんだよ』

「ふええ」

前世の漫画やアニメで見た精霊より、実物の二匹はもっと綺麗で美しい。

楽しい気分を味わう中、ふと周囲の様子に気づいた。

少しずつ世界の色が薄くなっているような……？

はつきり見えていた空や木の色素が薄い感じがする。

前世で様々な本を読んできた私は、なんとなく状況が理解できた。ここが絵本の最後なんだ。私が察すると同時、絵本の世界はさらに色合いが薄くなり始めた。

『さようなら、ステラ。一緒に旅してくれてありがとう。君に会えて本当によかったよ。またいつか会おうね』

『あんまりお喋りできてなくて残念だけど、そろそろお別れだね』

「……しょつか、もうお別れなのね」

私の胸に寂しさが去来する。

彼らとの冒険は言葉では表せないほど楽しく、お別れが辛かった。本の世界に入ればまた会えるとは思うけど……やっぱ、寂しいな。

一方のクローディとピュリティもまた、しょんぼりする私を切なげな表情で見る。私と同じように寂しいと思ってくれてたら嬉しい。

彼らは互いに顔を見合わせた後、クローディが真剣な表情で告げた。

『もしよかったら、僕たちもステラの世界に連れて行ってくれないかい？』

「えっ、しょんなことできるの!?」

驚きのあまり目を見開いた私に、今度はピュリティが真摯な瞳で話した。

『私たち精霊の力の源は聖属性の魔力だね。ステラちゃんに魔力を分けてもらえば同じ世界で過ごせるの。いつもこの本を持ってなくて大丈夫だから。私たちもステラちゃんと一緒にいたいわ』

「お別れしないでいいのね!? やっちあー!」

喜びのあまり短い両手で万歳する。

心が通じ合った、優しくて可愛くてモフモフの友達といられて嬉しかった。

「これからもずっと一緒!」

力いっぱい叫んだ瞬間、またあの白い光が私の身体から放たれた。

光が収まったと思うと、周囲の景色はリヴィエル公爵家の見慣れた部屋に戻った。

やっぱ、本の世界に入り込んでいたんだ。

……そうだ、時間は!?

慌てて壁掛け時計を確認するも、時計の針はまったく進んでいない。

どうやら、本の世界に入っている間は時間が止まるようだ。

自分のことながら、すごく素敵な魔法（だよね?）を使っちゃった。

……この力がパパ様の役に立ったらなあ。

あのパパ様のことから、ただ会っただけじゃ追い返されるに決まっている。

私は有益な存在だと実感してもらわなければ。

もしかしたら、この本の世界に入り込む力はパパ様のお仕事を手助けできるかもしれない。いずれにせよ、たくさんの勉強が必要だ。

私が住むこの世界や魔力、魔法についても、もっと詳しく知った方がいいだろう。

……よし、リヴィエル公爵家の図書館に行こう!

まだ行ったことはないけど、部屋から見える白い建物がそうだとティナたちが教えてくれた。  
三階建ての建物で、歩いて二分くらいの距離だろうか。

たしか、中に入るにはパパ様の正式な許可が必要なはず。

本の世界に入る力の話をして、誰かに連れていってもらった方がいいのかな？

……いや、どうせなら最初に打ち明けるのはパパ様にしたいから一人で行こう。

許可の件は……きつと大丈夫！

一応、図書館に行きますと置き手紙を置いておく。

「クローディ、ピュリティ、出てきて〜」

ぼんつと可愛い音がして、先ほど本の世界で出会った二匹と再会する。

「あそこの白い建物に行きたいの。図書館よ」

『任せて、お安いご用さ』

『私の背中に乗ってちょうだい〜』

ピュリティに乗って窓から飛び出した。すいすいと空中を飛び、図書館の屋上に乗ると天窓を見つけた。開けようとするけど動かない。

「鍵が掛かってて開かない〜」

『僕が開けてあげようね』

クローディが爪で窓枠を触ると簡単に開いてしまった。

すごい！

こっそりと中に入る。

図書館特有の本の香りが懐かしく、いくつもの本棚が並ぶ光景はそれだけで気分が高揚した。

誰もいないようで、静かに魔法関連の書棚を探す。この世界で重要な存在のためか中央一帯がそのエリアだった。

たくさん本を見ながら私は考える。

私のこの力は、本の世界に入れる力と考えて間違いないだろう。

夢のように素敵な一方で、どんなことができるのか私自身まだよくわかっていない。

今わかっているのは、①本の世界に入る、②その世界を実際に体験できる、③登場人物と話せる……の三つだ。絵本だから可能だったのか、より詳しい調査と研究が必要だろう。

魔法全般で調べると範囲が広すぎるから、事前に読むジャンルを絞りたい。

聖属性の魔力が私には宿ると聞いた。

となると、魔力の属性に関する本をまずは探してみよう。

初歩的な本はあるかな？ 絵本の類이었다たら確実に入れるはず。

「魔力の属性について描かれた絵本が読みちゃいの」

『は〜い、私は左側から探すわ〜』

『じゃあ、僕は右側の棚を見てみよう』

みんな得手分けして探すも、そもそも絵本自体置かれていなかった。

難しい専門書や学術書ばかりだ。



うーん、残念。

目的の絵本はなかったものの、良さそうな学術書が一冊あった。

【ヴァルステイン帝国における魔法と魔力、周辺国との歴史について】という本で、執筆されたのは今からおよそ五十年前だ。著者はレティシア・ブリュネと書かれており、著名な大学の教授を務めた人物らしい。学術書は教科書みたいな本なので主人公はいない。

この本に入ったらどうなるんだろうか。

絵本には物語としての明確な終わりがあつたけど、こういう勉強系の本における終わりはどういう扱いなのか気になる。

最初から最後まで勉強しないと本の世界からは出られない？  
だとしたら、力を使わないで普通に読んだ方が早いかも……

せっかく本に入るのであれば著者と直接話せたらいいのに。

まあ、まずは試してみよう。

力を使うと私の身体は光るので、部屋の隅の目立たないところで本を捲る。

白い光に包まれた後、私は大きな部屋にいた。隣にはクローディとピュリティもいて、みんなで周りを見渡す。

目の前には階段状の座席が並び、私の後ろの壁には黒板みたいな板が掛けられていた。  
なんか見覚えがある感じ……そうだ、わかった。

ここは大学の講義室だと理解したところで近くの扉が開いた。

現れたのは藍色の髪を後ろでアップにした知的な淑女だ。

マチルダさんと同じくらいの年齢だろうか。

「あらあら、精霊を連れて女の子に講義するなんて初めての経験だわ」

「初めまして、わたちはステラでしゅ。こっちはお友達のクローディとピュリティでしゅ」

「ふふっ、よろしく。私はこの本の著者、レティシアよ。あなたは何を学びたいのかしら？」

「えっ、著者しやんでしゅか!？」

「ええ、そうよ。この本に書かれていることなら何でも教えられるわ」

すごい……本当に著者と話せた！

ぼんやり考えていた私の願いが反映されたんだ！

この機会を逃してはダメ！

「魔法と魔力についての基本を教えてほちいでしゅ」

「基本なんて難しい言葉をよく知っているのね。じゃあ、一番前の椅子に座って」

レティシアさんはチョークみたいな小さい棒で魔法陣っぽい絵をさらさらと書く。

なんだかワクワクしちゃう。

「魔力とは魔法を使うためのエネルギーよ。誰でも持っているけど、人によってどれだけあるかは違うわ。使いすぎると疲れちゃうから気をつけて」

「あい、気をつけましゅ。今こうやって本の世界に入っているのも魔法なんでしゅか？」

「そうね。でも、こんな魔法があるなんて私も初めて知ったわ。あなた、不思議な女の子ね」

「私には聖属性の魔力があるみたいなんでしゅ」

「あら……」

レティシアさんは真剣な表情に変わり言葉を切る。

しばし何事かを考えた後、彼女は難しい顔で切り出した。

「聖属性の魔力を持つ人は、他の属性にはできない特別な魔法を使えるの。あなたの力もきっとそれね。ただ、持ち主がいなさすぎて研究が疎に進まなかったわ。この本を書いたときにさえ、たった二人しかいなかったくらいだから。だから、聖属性について記された他の書物を読んだり、自分でいろいろと力を使って試していくのをおすすめするわよ。幸い、あなたは子どもにしては魔力が豊富みたいだし」

なるほど……思ったより貴重な魔力なのだとよくわかった。

レティシアさんは魔法関連だけでなく、帝国周囲の地理についても教えてくれた。

あの怖いドラウゼン軍事連邦は五十年前からずっと変わらないらしい。その他周辺国の知識も教えてもらい、講義は終了となる。

バイバイと手を振り光に包まれると、リヴィエール公爵家の図書館に戻ってきた。

やっぱり、本を読むのは楽しかった！

どんどん新しい世界のことが知られるし、実際に体験できるのは本当に幸せだ。この調子で他にも読みたかったけど足音が聞こえてきたので、急いでピュリティの背中に乗って外に出る。

『じゃあ、ステラの部屋に戻るうか』

## 立ち読みサンプルはここまで

「あい、そろそろ二人が帰ってくる頃でしゅ」

私が部屋に入ってクローディたちが姿を消すと同時、部屋の扉が開いた。ティナとマチルダさんが現れる。

「お待たせしました、ステラお嬢様。お行儀よく待てて偉いですねえ」

「あたいたちのお世話はいらないんじゃないかと思つてしまいます」

ほんとは図書館に行っちゃったけど黙つておいた。

もつといろんな本を読んで、自分の力について理解を深めよう。

その日から、力の研究がこつそりと始まつた。



レティシアさんと話してから、あつという間に三日が過ぎた。

その間も私はお世話の合間にあの図書館に行つてはいろんな種類の本を選び、実際に体験する日々を送っている。助言に従つて自分の力をいろいろと試すのだ。

聖属性の魔力に関する本は全然見つからない。珍しい魔力ということだし、そもそもリヴィエール公爵家の図書館には置いていない可能性もあった。

次でちょうど二十冊目になる。

念のため、休み休み読んでいるから体力も魔力も十分だ。

選んだのは石の図鑑で、本のタイトルは【帝国の鉱石とその有用性について…第一巻】。

まずは軽く眺めてみる。

以前は本を捲るとすぐにその世界に入ってしまったけど、今は練習の成果が出たからか、力を使わずに普通に本を読めるようになった。

図鑑は鉱石の絵がいっぱいでとても綺麗。それぞれの説明も豊富だ。子ども向けではなく、学術書の一步手前くらいの難易度とわかつた。

第二巻にも目を通したところで私は力を使う。

いつもの白い光が収まると、どこか暗い空間にいた。

一緒に本の世界に入ったクローディとピュリティの身体がぼんやり光っていて、全体がなんとなくわかる。壁も天井も分厚い岩石できていているようだ。

「地下道……いや、洞窟<sup>どうくつ</sup>でしゅかね」

「うん、ここは地底の洞窟だね。明かりをつけよう」

『待つて、クローディ。誰か来るわ』

前方から光の球がゆらゆらと近づいてきて、暗がりから男の人がぬつと顔を出した。

「何か心配がするから近づいてみたけど……これは珍しいお客さんだね。女の子に精霊か」

「こんにちは。ご本の著者さんでしゅか？」

「ああ、僕はトマス・デュボンという名前さ。よろしく。君の名前は？」

「ステラといいましゅ」